

平成21年8月28日

「反復新生児へモクロマトーシスに対し、日本で初めて実施した胎児治療の成功」について

香川大学医学部附属病院では、極めて生命予後のわるい反復新生児へモクロマトーシスに対し、我が国で初めて胎児治療を実施し、健常な新生児をえることに成功した。海外での Peter F Whittington (アメリカ) らが報告した免疫グロブリンによる治療成績を踏まえて実施したものである。出産後も経過良好で、7月初旬に母児ともに退院された。

概要

香川大学医学部附属病院では、極めて生命予後のわるい反復新生児へモクロマトーシスに対し、我が国で初めてとなる高容量免疫グロブリン療法による胎児期の治療を実施し、平成21年6月に健常な子どもの出産に成功した。

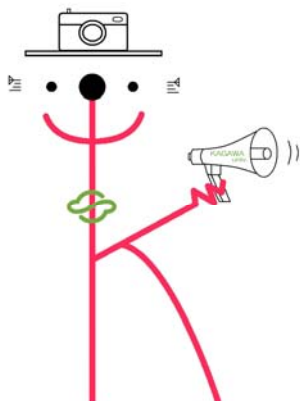
新生児へモクロマトーシスは、胎児期に肝臓を中心としたいくつかの臓器に鉄が蓄積する病気で、胎児期に進行し出生時には重篤な肝硬変の状態となっており、出生後の早期に肝不全をきたす極めて救命が困難な疾患である。この疾患は、遺伝的な背景がないにもかかわらず、次回以降の子どもに極めて高い発症率(90%以上)をきたすことから、妊娠中の母児間の免疫的な原因が想定されている。この予測のもとに妊娠中期以降に大量の免疫グロブリンを毎週点滴する治療(高容量ガンマグロブリン療法)が Peter F Whittington らにより行われ、非常に良好な結果が報告された。

当院では、平成20年11月に反復新生児へモクロマトーシスを来した患者さんが妊娠初期に受診された。今回の妊娠経過も予後不良であることが予測されたため、平成21年2月から高容量免疫グロブリン療法を実施した。妊娠は、順調に経過し、平成21年6月に妊娠37週で3,119gの男児を出産された。新生児は、肝機能を含めて大きな異常は認められず、健常児と考えられた。出生後も経過良好にて7月初旬に、母児ともに退院された。

以上のことについて、下記のとおり記者発表を行います。

記

- 1 日時 平成21年9月3日(木) 午後3時30分～
- 2 場所 香川大学医学部管理棟4階の会議室1
- 3 本院の出席者 石田俊彦 病院長、秦利之 周産期科女性診療科長、伊藤進 小児科長、田中宏和 周産期科女性診療科講師



➤ 問い合わせ先

香川大学 医学部 総務課広報法規担当 西川武春

TEL : 087-891-2008 FAX : 087-891-2016

E-mail:kouhou@med.kagawa-u.ac.jp

「反復新生児ヘモクロマトーシスに対し、日本で初めて実施した胎児治療の成功」について

香川大学医学部附属病院では、出生後に極めて致死率の高い病気である新生児ヘモクロマトーシスに対して、日本で初めての胎児治療を実施し、平成 21 年 6 月に健常な新生児をえることに成功しました。

出産後も経過良好で、7 月初旬に母児ともに退院され、現在まで経過良好です。

この胎児治療は、海外で Peter F Whittington らが報告した免疫グロブリンによる治療成績をふまえて実施したのですが、日本だけでなく東アジアで初めての治療成功例であるため、今回記者発表を行うことといたしました。

概要

新生児ヘモクロマトーシスは、胎児期に肝臓を中心としたいくつかの臓器に鉄が蓄積する病気です。明らかな原因は証明されていませんが、お母さんのお腹にいる間（胎児期）に臓器障害が進行し、重症例では出生時に重篤な肝硬変や腎機能障害の状態となっています。そのため、出生後の早期に肝不全・腎不

全をきたし、救命が極めて困難な疾患とされています。日本では、今回の妊婦様の以前の妊娠例を含めて21例の報告がありますが、救命できたのは軽症であった1例のみでした。

この病気は遺伝的な背景がないにもかかわらず、兄弟の発症が多いといわれ、特に次回以降の子供に極めて高い発症率（90%以上）をきたすことから、妊娠中の母児間の免疫的な原因がかんがえられました。つまり、妊娠中に何らかの因子（ある種の免疫グロブリン）が、母親から胎盤を介して赤ちゃんに移行することで、赤ちゃんの臓器に悪さをするのであろうと考えられています。この予測のもとに妊娠中期以降に大量の免疫グロブリンを毎週点滴する治療（高容量ガンマグロブリン療法）が Peter F Whittington らにより行われ、非常に良好な成果が報告されました。

香川大学医学部附属病院では、平成16年と平成17年に出産されましたが、2人とも新生児ヘモクロマトーシスで新生児死亡に至った患者様が、平成20年11月に妊娠され受診されました。今回の赤ちゃんについても救命が極めて困難であることが予測されたため、当院にて治療方針について十分に検討した上で、ご両親に説明と同意を得た上で、平成21年2月から高容量免疫グロブリン療法を

実施致しました。その結果、妊娠は順調に経過し、平成21年6月18日（妊娠37週0日）に3119gの男児を出産されました。赤ちゃんは、肝機能を含めて大きな異常は認められず、健常児と考えられました。出生後も良好に経過し、7月初旬に、お母さんとともに退院されました。7月15日と8月12日に生後1ヶ月および2ヶ月の健診を行いました。全身状態・発育ともに正常に経過しております。

香川大学医学部附属病院 周産期科女性診療科

診療科長・教授 秦 利之

主治医 田中宏和